

ブロウの丘の教会

(試訳) M. アーノルド

ブロウの丘の教会

I

東 城 眞 造

古城

サボイの溪谷に鳴り響きながら、
この古城の周りに反響しながら、
遠い山荘の真中で
聞け！ 教会の鐘の音は何を吊っているのか？

明るい10月の朝に
サボイの侯爵は彼の花嫁を残して行った。
古城から、釣り上げ橋を渡って、
狩猟者たちの楽しい季節が到来した。

馬は嘶き、付き添い人たちははしゃいだ。
彼女の縦仕切りのある部屋の窓から
笑みを浮かべた君主に向かって 陽気に挨拶を交わし、
侯爵夫人マーグリートは微笑んだ。

ウイーンからダニューブ河の畔を通り、
春に、花嫁となって、ここにやって来た。
今は秋が森の木々をさやさやと波立たせる。
ハンター達は集まり、ラッパが響きわたる。

猟犬たちは引っ張り、猟の付き添い人たちは罵り、
馬たちは苛立ち、猪を槍でつく人たちは喜ぶ。
遠く！ フランス側の、西の方へ、
彼らは湿地の森を通りすぎて行く。

聞け！ 狩猟は徒歩で行われ、動物は逃げ回る！ —
寂しい森の騎馬道を下り、
猛烈な、 — 一騎討ちの御者たちは進んで行く —
聞け！ 叫び — 轟き — 呻き！

東 城 眞 造

青白く息もとぎれとぎれに、狩獵者たちが帰って来た、
芝生の上に猪が死んで横たわっている —
恐ろしい事よ！ 侯爵も猪の傍らで死んでいる、
意識もなく、血まみれになって。

* * * *

鈍い10月の夕べに、
葉っぱの散った森の路の下のほうへ下り、
古城へ、釣り上げ橋をとおって、
ハンター達は彼らの獲物を携えて帰ってきた。

広間の、輝いている大きな食台に、
彼女の椅子のまわりで婦人たちは待っていて、
上座の下に、微笑みに包まれて
侯爵夫人マーグリートは坐った。

聞け！ 開いた門の下のところで！
人の足音と鋭く響く命令！
“—これが狩獵から帰ってきた私の獲物 —”
そして侯爵夫人は手をたたく。

疲れてゆっくりと、狩獵者たちは帰って来た —
宮廷内の暗闇の中で立ち止まった。
“—おお、こちらへ、汝ら遅かった狩獵者たちよ！
ホールの方へ！ 獲物はどうだった？ 獲物は？” —

彼らの頭(かしら)と一緒にゆっくりと入って来て、
彼らは獲物をホールに置いた。
彼のコートは木の葉が付いて血で汚れていて、
怒りの顔は額に現れていた。

彼女の王子に相応しく若々しい夫は
彼のういういしい妻の前の、
突き出た燭台の下に血まみれになって置かれた —
そしてその光景は彼女の命を凍らた。

* * * *

ブロウの丘の教会

ダニューブ河の畔のウイーンで、
王様たちは酒盛りをし、紳士たちは会い集う。
最も陽気な者の中で年老いた元気ものは
侯爵夫人マーグリートであった。

ダニューブ河の畔のウイーンで、
若者たちは宴会と踊りで紛らわし、
その時までは彼女は決して悲しまなかった。
しかしそれから彼女は決して微笑まなくなった。

サボイの山間の谷間で
街や狩猟者から遙かに離れて、
侯爵夫人モードが始めたところの、
教会は未完成のままに、侘しく立っている。

あの厳格な侯爵夫人が、
老齢になって、震える手でもって再建を始めた。
しかし彼女は教会が建築中に死に、
そして教会は未完成のままに立っている —

彼女が死んで墓に入るとき、
大工たちが残した以前のままに教会は立っている。
山の芝生が聖壇所を敷きつめ、
蛍ぶくろの花が本堂の中に咲いている。

“ — 私の古城では全てが悲しい”
侯爵夫人マーグリートはその時言った。
“山の方へ、誰か、私を案内して下さい！”
“私たちは再び教会を建てよう” —

草鞋を履いた聖地巡礼者たちが、家の方に向かう時、
シリアからオーストリアの騎士たちが来た。
“ — おお番人たちよ！ 貴婦人に対する尊敬の誓いを
オーストリアの彷徨い人たちがもたらしたのだ” —

東 城 眞 造

彷徨える人たちは門のところで答えた。

“—おお騎士たち、お前たちの知っている彼女が去った！
我々の君主は死に、彼の侯爵夫人は行ってしまった。
ブロウの丘の教会の辺りで彼女を探してくれ！” —

オーストリアの騎士たちや大変疲れた巡礼者たちは
曲がりくねった山路を登ってくる —
溪谷に着き、そこでは教会の建物が
日ごとに高くなっていく。

石は削られ、ハンマーは鳴り響いている、
サボイの丘の草原の、
松の木々の下の、流れの畔で、
輝かしい太陽は仕事の間じゅう照っている。

侯爵夫人は彼女の白い婦人用乗馬に乗って
働いている人たちの列を眺めている —
フランダースの彫刻家たち、ロンバルトの金箔師たち、
ドイツ人の石工たち、スペインから来た鍛冶屋たち。

黒い服を着て、彼女の白い乗馬に乗って
老齢の建築家の傍にいる —
そこで彼らは朝も昼も夕べも、
山の中にいる彼女を見つけた。

教会に屋根が完成し終わるまで、
彼女はそこに坐って、職人が建てるのを見た。
最後の最後に、本堂の石の墓に
職人たちは彼女の記念碑を建てた。

墓には二人の像を彼らは彫った、
白い大理石の表面にまるで生きているかのように —
一つは、権力のある軍服姿の侯爵、
もう一つは、ヴェールを被った侯爵夫人。

ブロウの丘の教会

墓の周囲には透かしばりに削った石が
復活祭に建てられた。
それから侯爵夫人は彼女の仕事を終え、
そして彼女はセント・ジョン寺院に埋葬された。

II

教会

新しい大建築物の輝く薄墨色の屋根の上で、
太陽は燦々と輝いている。
河は跳ねるように流れて行く。
丘は太陽をさえぎる松の木々で覆われている。
それらの下の、輝かしい緑の野の真中に、
人々から離れて、教会は高々と立っている。
これは何という教会なのか？
それがブロウの丘の教会である。

露のおりた小屋から、朝日に照らされて、
その流れを横切って、牛の群れが
逃げないように柵のまわりに見られる —
昨年彼らが横たわったところの
爽やかな緑の開けた丘の芝生の
四角に刈り込んだ教会の柵壁。
しかし全ての物が今は秩序正しく
ブロウの丘の教会のまわりに出来ている。

日曜日毎に、朝の礼拝の鐘の音に、
アルプスの農夫たちが、二三人づつ一緒に、
お祈りをする為にここに登ってくる。
民衆や貴婦人たちも、夏の早朝に、
灰色のマントを着て
チャンベリーから教会へ馬に乗って来る。
しかしブロウの丘の教会の辺りは
人気もない無為の時間が侘しく過ぎるだけである。

東 城 眞 造

山路をずっと下って
通りの向こうの城壁をめぐるした街から、
日曜日毎に、一人の牧師がやって来る。
その時あなた方はオルガンの音を聞き
白いガウンを着た牧師が聴衆に向かって説教すのを聞き、
そして人々はお祈りをする。
しかしプロウの丘の教会の辺りは
森と野原があるだけで静かなままである。

礼拝の後、大衆が行ってしまうと、
墓苑の周りを彷徨ようて
人々は本堂の方へ行く。
そして石の墓のいろんな形に驚き、
鑿で彫った珍しい装飾品などを称賛する —
それから彼らはみんな去って行く。
プロウの丘の教会には
王族に相応しい二人の墓だけが寂しく残っている。

III

墓苑

安らかに、永久に安らかに眠れ、おお王族に相応しい二人よ！
静かな山の空気の中であって、あなたの高地の教会には、
羊や山羊、犬、そして家来たちは決して来ない。
本堂の豊かなステンドグラスの窓から、
通路や側道、そしてあなたの大理石の墓の上に、
ただ祝福された聖人たちだけが黙して微笑んでいる。
若い王子よ！ 汝の侯爵夫人が眠っている
縁取りのついたマットからは決して起き上がらないだろう。
秋の朝ごとに、ラッパが響くとき、
爽やかな森で夕べまで猪の狩猟をするために、
犬たちを従えて釣り上げ橋を馬に乗って横切って行く。
おお王女よ！ 汝と汝の貴婦人たちは、
広いホールで、血まみれの獲物をもった狩猟者たちを、

ブロウの丘の教会

古城の門まで夜になっても出迎えることはないであろう。

眠れ、永久に眠れ、おお大理石の墓の二人よ！

また、もし汝らが目を覚ましたら、そのままにしておけ、
そのときよくせつのある西側の正面は美しく

夕日の光に洗われている、そして色鮮やかな予言者たち、
神格化された聖人たち、勇敢な殉教者たちを、
本堂の大きな西側の窓に見るであろう。

墓の周りの敷石に輝くサファイアの色合い、
紫水晶やルビィ ——市松模様の石積をきらめかす、
それから汝らが眠る石の上にあなたの臉を開き、
刺繡した枕からあなたの頭を上げる。

そして、温かいバラの色合いを、
明るく照らされた燧石をしらべあなたの足元に目を落とし、
言う。「此れは何だ？ ——許されて ——我々は至福の中にいる、
天国の宮廷の敷石を見よ！」と。

さもなくば秋の夜のままだしておいてくれ、その時
雨がお前の上の滑らかな威厳のある屋根にさらさらと降り、
壁に彼女の憂鬱な光を時折り流し

高窓からの月が輝き、風は山の松の木々を通して洗う。

それから、薄墨色の高い柱の間に汝たちが眠る、
木の葉で覆われた無情な森に目を凝らしながら、

「聞け、それが永遠である！」と汝たちは言うであろう。

「これは天国の微かに輝く淵であり、天国の宮殿の柱である！」

そして風が吹きすさぶ中で、あなたの耳は

天使たちの翼の羽ばたきを聞くであろう、

そして地衣で覆われた屋根の上に

永遠の愛の雨がさらさらと鳴るのを聞くであろう。

(完)

東 城 眞 造

(資料)

THE CHURCH OF BROU

— Matthew Arnold

I

The Castle

Down the Savoy vallerys sounding,
Echoing round this castle old,
'Mid the distant mountain-chalets
Hark! what bell for church is toll'd?

In the bright October morning
Savoy's Duke had left his bride.
From the castle, past the drawbridge,
Flow'd the hunters' merry tide.

Steeds are neighing, gallants glittering;
Gay, her smiling lord to greet,
From her mullion'd chamber-casement
Smiles the Duchess Marguerite.

From Vienna, by the Danube,
Here she came, a bride, in spring.
Now the autumn crisps the forest;
Hunters gather, bugles ring.

Hounds are pulling, prickers swearing,
Horses fret, and boar-spears glance.
Off! — They sweep the marshy forests,
Westward, on the side of France.

Hark! the game's on foot; they scatter —
Down the forest-ridings lone,
Furious, single horsemen gallop —
Hark! a shout, — a crash — a groan!

ブロウの丘の教会

Pale and breathless, came the hunters;
On the turf dead lies the door —
God! the Duke lies stretch'd beside him,
Senseless, weltering in his gore.

* * * *

In the dull October evening,
Down the leaf-strewn forest-road,
To the castle, past the drawbridge,
Came the hunters with their load.

In the hall, with sconces blazing,
Ladies waiting round her seat,
Clothed in smiles, beneath the dais
Sate the Duchéss Marguerite.

Hark! below the gates unbarring!
Tramp of men and quick commands!
“ — 'Tis my lord come back from hunting — ”
And the Duchess claps her hands.

Slow and tired, came the hunters —
Stopp'd in darkness in the court.
“ — Ho, this way, ye laggard hunters!
To the hall! What sport? What sport?” —

Slow they enter'd with their master;
In the hall they laid him down.
On the coat were leaves and blood-stains,
On his brow an angry frown.

Dead her princely youthful husband
Lay before his youthful wife,
Bloody, 'neath the flaring sconces —
And the sight froze all her life.

* * * *

東 城 眞 造

In Vienna, by the Danube,
Kings hold revel, gallants meet.
Gay of old amid the gayest
Was the Duchess Marguerite.

In Vienna, by the Danube,
Feast and dance her youth beguiled.
Till that hour she never sorrow'd;
But from then she never smiled.

'Mid the Savoy mountain valleys
Far from town or haunt of man,
Stands a lonely church, unfinish'd,
Which the Duchess Maud began;

Old, that Duchess' stern began it,
In gray age, with palsied hands;
But she died while it was building,
And the Church unfinish'd stands —

Stands as erst the builders left it,
When she sank into her grave;
Mountain greensward paves the chancel,
Harebells flower in the nave.

“ — In my castle all is sorrow,”
Said the Duchess Marguerite then;
“ Guide me, some one, to the mountain!
We will build the Church again.” —

Sandall'd palmers, faring homeward,
Austrian knights from Syria came.
“ — Austrian wanderers bring, O warders!
Homage to your Austrian dame.” —

ブロウの丘の教会

From the gate the warders answer'd:
“ — Gone, O knights, is she you knew!
Dead our Duke, and gone his Duchess;
Seek her at the Church of Brou!” —

Austrian knights and much-worn palmers
Climb the winding mountain-way —
Reach the valley, where the Fabric
Rises higher day by day.

Stones are sawing, hammers ringing;
On the work the bright sun shines,
In the Savoy mountain-meadows,
By the stream, below the pines.

On her palfrey white the Duchess
Sate and watch'd her working train —
Flemish carvers, Lombard gilders,
German masons, smiths from Spain.

Clad in black, on her white palfrey,
Her old architect beside —
There they found her in the mountains,
Morn and noon and eventide.

There she sate, and watch'd the builders,
Till the Church was roof'd and done.
Last of all, the builders rear'd her
In the nave a tomb of stone.

On the tomb two forms they sculptured,
Lifelike in the marble pale —
One, the Duke in helm and armour;
One, the Duchess in her veil.

東 城 眞 造

Round the tomb the carved stone fretwork
Was at Easter-tide put on.
Then the Duchess closed her labours;
And she died at the St. John.

II

The Church

Upon the glistening leaden roof
Of the new Pile, the sunlight shines;
The stream goes leaping by.
The hills are clothed with pines sun-proof;
'Mid bright green fields, below the pines,
Stands the Church on high.
What Church is this, from men aloof?
'Tis the Church of Brou.

At sunrise, from their dewy lair
Crossing the stream, the kine are seen
Round the wall to stray —
The churchyard wall that clips the square
Of open hill-sward fresh and green
Where last year they lay.
But all things now are order'd fair
Round the Church of Brou.

On Sundays, at the matin-chime,
The Alpine peasants, two and three,
Climb up here to pray;
Burghers and dames, at summer's prime,
Ride out to church from Chambery,
Dight with mantles gay.
But else it is a lonely time
Round the Church of Brou.

ブロウの丘の教会

On Sundays, too, a priest doth come
From the wall'd town beyond the pass,
 Down the mountain-way;
And then you hear the organ's hum,
You hear the white-robed priest say mass,
 And the people pray.
But else the woods and fields are dumb
Round the Church of Brou.

And after church, when mass is done,
The people to the nave repair
 Round the tomb to stray;
And marvel at the Forms of stone,
And praise the chisell'd broideries rare —
 Then they drop away.
The princely Pair are left alone
In the Church of Brou.

III

The Tomb

So rest, for ever rest, O princely Pair!
In your high church, 'mid the still mountain-air,
Where horn, and bound, and vassals, never come.
Only the blessed Saints are smiling dumb,
From the rich painted windows of the nave,
On aisle, and transept, and your marble grave;
When thou, young Prince! shalt never more arise
From the fringed mattress where thy Duchess lies,
On autumn-mornings, when the bugle sounds,
And ride across the drawbridge with thy hounds
To hunt the boar in the crisp woods till eve;
And thou, O Princess! shalt no more receive.

東 城 眞 造

Thou and thy ladies, in the hall of state,
The jaded hunters with their bloody freight,
Coming benighted to the castle-gate.

So sleep, for ever sleep, O marble Pair!
Or, if ye wake, let it be then, when fair
On the carved western front a flood of light
Stream from the setting sun, and colours bright
Prophets, transfigured Saints, and Martyrs brave,
In the vast western window of the nave;
And on the pavement round the Tomb there glints
A chequer-work of glowing sapphire-tints,
And amethyst, and ruby — then unclose
Your eyelids on the stone where ye repose,
And from your broider'd pillows lift your heads,
And rise upon your clod white marble beds;
And, looking down on the warm rosy tints,
Which chequer, at your feet, the illumined flints,
Say: *What is this? we are in bliss — forgiven —*
Behold the pavement of the courts of Heaven!
Or let it be on autumn nights, when rain
Doth rustlingly above your heads complain
On the smooth leaden roof, and on the walls
Shedding her pensive light at intervals
The moon through the clere-story windows shines,
And the wind washes through the mountain-pines.
Then, gazing up 'mid the dim pillars high,
The foliaged marble forest where ye lie,
Hush, ye will say, it is eternity!
This is the glimmering verge of Heaven, and these
The columns of the heavenly palaces!
And, in the sweeping of the wind, your ear
The passage of the Angels' wings will hear,
And on the lichen-crustled leads above
The rustle of the eternal rain of love.

— End —